

## 切除可能大腸癌閉塞への自己拡張型金属ステント (self-expandable metallic stent: SEMS) 留置術の経験

おく だ じゅん ぞう にわ の とし ゆき さわ だ よし ゆき  
 奥 田 淳 三 庭 野 稔 之 澤 田 芳 行  
 もり わき よし ひろ おお つか あき お おお たに じゅん  
 森 脇 義 弘 大 塚 昭 雄 大 谷 順

キーワード：大腸ステント，進行大腸癌，口側病変検索

### 要 旨

大腸癌閉塞の治療はこれまで，二期的手術や緊急の不十分な根治手術を余儀なくされることが少なくなかった。2012年に大腸ステント（自己拡張型金属ステント：(self-expandable metallic stent: SEMS) 留置が保険収載され，イレウス症状を併発する大腸癌に対して，根治手術が前提の緊急手術回避（bridge to surgery: BTS）として使用されるようになってきた。

適応症例の多い都市部の大病院を中心に広まりつつあるが，内視鏡とX線透視を併用すれば，地方の中小規模病院の限られたマンパワーの下でも，安全確実に留置することが可能である。

いずれも腹部症状を訴えて緊急外来を受診した大腸癌閉塞の2症例に対して，根治手術前に大腸ステントを留置したので，その臨床経過について報告する。さらに同手技の実践上の課題について，若干の文献的考察を加え報告する。

### はじめに

大腸癌閉塞への緊急対応は従来，経肛門的イレウス管や保険外の各種ステントの代用，一時的人工肛門等による腸管減圧，あるいは術前減圧処置なしでの緊急切除術が一般的であった。しかし，これらの処置では十分な減圧が困難，経済面や安全面が未確立，高侵襲などの問題があった。緊急

切除とした場合も，前処置不良なため一期的根治手術は危険との判断の下，主腫瘍切除のみで，二期的手術を要することが少なくなかった。仮に一期的手術をし得てもリンパ節郭清が差し控えられたり，また十分なリンパ節郭清ができて，primary anastomosis 後の縫合不全が懸念され，Hartmann 手術や一時的口側人工肛門造設を余儀なくされたりした。また，口側大腸の術前評価が不十分なため，口側病変の見落としも懸念されていた。

大腸用の自己拡張型金属ステント（self-

Junzo OKUDA et al.

雲南市立病院外科

連絡先：〒699-1221 雲南市大東町飯田96-1

雲南市立病院外科